

連日止むことのないロシアのウクライナ侵攻のニュースに胸が痛みます。ミサイルの命中する先には人々の命があり、大切な生活の場所があるからです。更に原発を盾にして、また、陣地にして、攻撃をしているとのニュースには絶望感のようなやりきれない思いにもなります。

日本も 1904 年、ロシアを相手に戦争をしました。朝鮮半島と満州の権益を守るためであり、結果、勝利し、日本は中国侵略を強化したのです。この時の日本はウクライナに侵攻している現在のロシアと全く同じ姿勢であったとしか、言いようがありません。むき出しの帝国主義、植民地主義です。

この戦争で日本にもロシアにも戦死者がでましたが、戦友の戦死を悲しむ歌が 1905 年に作られ、長く日本人に歌われてきました。

♪ **ここは 御国を 何百里 離れて遠き 満州の 赤い夕日に照らされて 友は野末の 石の下** ♪

夫は 1941 年、旧満州の大連市で五人兄弟姉妹の末っ子として生まれ、1947 年に引き揚げてきました。そのせいか、自分は「侵略者の末裔」とであると自認していましたし、「中国残留孤児」は他人事とは思えないなどと言っては、目頭を押さえて報道を見ていました。私が驚いたことには、夫は兄たちが歌っていた当時の流行歌や軍歌をしっかり記憶していて、懐かしそうに何度も歌うのです。私はこの歌を夫によって知ったのです。大連が生まれ故郷であれば、確かに望郷の念はあります。けれども、負の遺産を背負っている身には軽々しく大連を懐かしむことはできないと夫は思っていました。

私はやはり一度は訪ねたほうが良いと思い、アカシアの花に思い入れのある夫のために 2010 年 5 月に大連、旅順のツアーを申し込みました。地図を持って行き、かつて住んでいた満鉄の社宅跡地に、一棟だけ残っていた廃墟の建物を見つけた時の感慨はひとしおでした。大連港、ヤマトホテル、市街電車、星の浦海岸など、60 年以上前の「古い記憶」と同じものを見て、夢見心地のようでした。



旅順で日露戦争激戦の跡地二百三高地も訪ねました。日本人観光客だけが行く場所でしょう。中国人にとっては自国の領土であるのに、侵され、踏みにじられた場所です。そこに一つの看板を見つけました。日本人以下に扱われ、殺された中国人、奪われた多くのもの。中国人は日本人とは比べられないほどの苦痛、屈辱、悲しみを味わったことを私たちはそこで改めて感じました。これらの苦痛、屈辱、悲しみを与えたのは日本人

であることを忘れてはいけない、申し訳なかったとの念に駆られました。

「終戦記念日」を迎えます。私は当時は幼児でしたが、疎開し、家を焼かれ、空襲に逃げ惑い、食べ物もなく、栄養失調で弟が死亡という悲惨な戦争の体験があります。けれども、被害者の意識だけでは済まないと思います。日本人には加害者として「負の遺産」があるのです。これを少しでも解消し、平和を構築していくことが常に求められていると思います。一市民には途方もない課題ですが、すべての人が共に生きられる世界が来ますようにと、熱望しています。